保育あきた瓦版

第５４号　平成３０年　１２月　１７日　　秋田県保育協議会　広報委員会

今年を振り返って

秋田県保育協議会会長　　川嶋　眞諒

今年も早いもので師走に入り残す所あと数日となりました。〝光陰矢の如し〟平成も今年最後の年となるのかと思うと何故か一抹の淋しさを覚える今日この頃であります。

特に、今年は災害が多かったように思います。西日本豪雨災害、北海道東部地震、又、数回となく日本列島を襲った迷路台風、今もって災害で亡くなられた方々に謹んで哀悼の意を表し、被災された皆様方に心よりお見舞申し上げます。被災地の一刻も早い復興と平和をお祈り致します。

今や日本各地で毎年のように大災害が起こっております。人間が如何に科学を発達させようと人知を超えた自然災害からは完全に逃れる事は出来ません。その驚異を目の当たりにした時、自己の無力さを痛感します。一人では苦しいでしょう。周りの人と励まし合いながら一歩を踏み出すことしかありません。幸いにも私共の故郷は大きな災害に遭遇しておりません。然しながら、若し突如地震、火事、台風等に遭った場合、持出袋、非常用備蓄品があるでしょうか。現実に水や電気、ガス、電話が使用できなくなった場合、本当の意味での直接災害を受けられた方々の辛さが身に染みるのではないでしょうか。私共も今一度原点に戻って、災害マニュアル等を見直す時期に来ているのではないでしょうか。子どもの安全と命を預かる施設ですから・・・。

現在の日本は、核家族により異世代の交流が少なくなっています。また、市場原理主義による実力主義から終身雇用制度が崩壊し、年功序列の意識が低下しました。社会や家族の姿が変化しても、高年齢を敬う心は人間として守り続けたい論理です。高齢者には長く生きてこられた経験と豊富な知恵があります。若い人にとっては人生の先輩であり先生です。その経験と知恵を表に出して、社会に蓄積させていくことが大切です。世間に発信されることによって、寿命と美しさと楽しみと力を得ることにつながります。翻って、自分のまわりや世の中を眺めてみて、正に「世間の目」を気にすることが如何に多いか、自分がそうじゃないと言い切れるかどうかは分かりませんが、私は少なくとも自分の意思を捨て、人の意見で動くようなことはしないつもりできています。然しもこう言うと、人の意見を聞かず勝手気ままにやっている、と言うことになるのかも知れませんがそれは紙一重、自分勝手になることは厳に戒めております。

この世間体を気にする、人の目を気にする、他の評判に右往左往するということは、実は国としての日本がそうであるように思います。国際社会の内での日本の評判にあまり気を使いすぎているように思うのです。第二次世界大戦での敗北が日本人を必要以上に委縮させてしまっています。逆に世界にはそれを笠に着て日本を痛めつけようとする様な趣も見られます。どちらもおかしな事であり、国際関係はお互い様。無茶なことでなければ、きちんと理屈の通ることなら堂々と振る舞っていいと思うのです。正に納得するように振る舞うのが良い、卑屈になって遠慮しても何もならない、北朝鮮みたいな態度にはどうかと思うのですが・・・。

手を抜いて適当に過ごしていたならば、自分の人生が適当な物の寄せ集めになってしまいます。何気なく繰り返される日常だからこそおろそかにせず心を込めて、気配り一つ一つを大切に、丁寧に扱う事が相手を思い自分自身を大切にすることに繋がってゆきます。

本年もまた一年最後の日、大晦日を迎えます。最後まで無為に過ごすことなく大切に自分自身の人生を過ごしたいものです。新しい年を迎えることが出来る有難さをよくかみしめて、感謝と慎みをもってどうぞ皆様ご自愛下さい。

平成の終わりに心に残ったドラマ

～台本がないからワクワク、ドキドキ～

秋田県教育庁幼保推進課指導班

副主幹（兼）班長　　花田　一雅

幼保推進課に戻るまで３年間、小学校に勤務しておりました。校内を巡回する途中で、いろいろなクラスにお邪魔するのですが、今でも忘れられないドラマについて紹介させてください。

高学年のクラスを訪れた時でした。大きな模造紙を広げて男女６人がグループで作業をしていました。その時、ダラダラと作業をしている男子児童３人にリーダーの女子児童が腹を立て、激しく叱責する場面に出会いました。男子児童３人は渋々作業を再開したのですが、その場は重苦しい空気に包まれました。偶然にも私と担任がその場に居合わせていました。何とも後味の悪い状況に、どうしようと顔を見合わせた時です。今度は別の女子児童が渋々作業を再開した男子児童３人に近づいて行きました。「きっと、追い打ちをかけるのだ！」と思った時です。女子児童は男子児童３人に、「さあ、今までの分、頑張ってよ。」と優しく声をかけ、そして興奮しているリーダーにも、「さあ、こっちも頑張ろう。」と声をかけたのです。予想と全く違う展開に私と担任はあっけにとられ、しばらく声も出ませんでしたが、素晴らしい場面に立ち会えた喜びで胸がいっぱいになりました。この女子児童の見事なフォローで場の空気は一転し、数分も経たないうちにグループ内で楽しそうな会話も始まりました。

もしも、私や担任がいたたまれずに、女子児童よりも先に介入していたらどうなっていたのでしょうか。もしかしたら、同じような展開になったかもしれません。しかし、大人の立場を利用した私たちの介入で同じ結果になったとしても、あの場に居合わせた子どもたちがこの出来事から学び取るものはとても少ないものになったでしょう。子どもたち同士が互いに関わり合い、学び合い、高め合う学びは、私たち大人がどんなに教えても獲得させることができない尊い学びであることを改めて認識できた瞬間でした。

女子児童があの場面で見事なフォローができたのは、小学校生活の様々な経験はもちろんですが、もしかしたら就学前までさかのぼるのかもしれません。いや、きっとそうだと思います。皆様の園で毎日展開されている素敵なドラマは、間違いなく小学校以降の学びにつながっています。子どもたちが主役の筋書きのないドラマを、今後とも御支援くださいますよう、心よりお願いいたします。

全国保育研究大会報告

秋田県保育協議会
副会長　田中　真由美

「すべての人が子どもと子育てに関わりをもつ社会の実現をめざして」のテーマのもと、去る１０月２４日(水)から２６日(金)まで川崎市の「カレッツかわさき」で第６２回全国保育研究大会が開催されました。

川崎市消防音楽隊の演奏とカラーガード隊「レッド・ウイングス」の華やかなドリル演技のオープニングで始まりました。厚生労働省子ども家庭局保育課企画官　唐沢裕之氏の行政説明で「子ども・子育て支援新制度」の見直しに係る検討で幼保連携型認定こども園における保育教諭の特例措置や幼児教育の無償化等について話されました。基調報告では万田康会長が平成３０年度７月豪雨(西日本豪雨)等の被災地訪問の報告と募金協力に対しての御礼と募金の延長について、また、北海道胆振東部地震についての募金等について話されました。

参加者交流会ではカレッツかわさきの大体育室でチアダンスチームやご当地アイドル「川崎純情小町」、ライブショーなど川崎市で活躍している方々の演技に会場が盛り上がりました。

第９分科会の公立保育所・公立認定こども園等の使命と地域社会での役割に、上小阿仁村立認定こども園かみこあに保育園　三浦裕保育士が「つながる子どもの育ち～地域で考える子どもの育ち～」と題して意見発表を行いました。

記念講演は「さんまのホンマでっか！？ＴＶ」に出演している人間性脳科学研究所所長武蔵野学院大学教授の澤口俊之氏が「子どもの脳をいかに育むか」の演題で、前頭前野の人間性知能ＨＱ(目標達成力)について話されたことを紹介します。

脳の成長は早く、5歳では80%、８歳まで９５％まで完成し８歳まではが重要である。よく遊ぶことが重要で特に自然の中で運動することが創造性、社会的スキル、レジリエンス(ストレス等に対する個人の対処能力～心の強さ・折れない心・耐久性・復元力などの総称)を育てる。子どもの脳の発達は身体運動と結びついていることが研究で明らかになっている。緑地での身体運動は最もよく、子どもの脳を発達させることに寄与する。有酸素運動、足の筋肉を動かすことに意味がある。

講演を聴きながら、秋田の子ども達は、当たり前のように自然あふれる環境で育っているのが、いかに幸せなことなのか改めて感じました。

来年は第６３回全国保育研究大会が２０１９年１１月１３日(水)～１５日(金)広島市文化交流館で行われます。

全国保育研究大会　意見発表園として参加して

上小阿仁村立認定子ども園　かみこあに保育園
保育士　三浦　裕

１１月２４～２６日に神奈川県川崎市で開催された「第６２回全国保育研究大会」に意見発表者として参加しました。私は、第９分科会　公立保育所・公立認定こども園等の使命と地域社会での役割という分科会で「つながる子どもの育ち～地域で共に考える子どもの育ち～」をテーマに発表させていただきました。

①０歳から 15 歳までの健やかな成長を願い、村、小中学校、保育園の連携を通じて相互理解を図り、一人一人の子どもの育ちを支援。

② 就学前教育から小学校教育への円滑な接続を図る。

を目的とした研究内容です。

初日は、開会行事に続き行政説明や基調講演、発表者打ち合わせ会などがありました。打ち合わせ会では、発表園である愛知県や高知県の方々と顔を合わせ、緊張し話す私の言葉に「秋田の方言ってあったかいねぇ」と嬉しい言葉をかけていただきました。夕方より参加者交流会、ここでも他県の方々と情報交換をしたり、和気あいあいと話をしたりする事ができました。二日目は初日の件もあって、とても和やかな雰囲気の中で発表をすることが出来ました。公立・民間の垣根を超えた地域の取り組みや、そこに関わる人も大勢いてその規模に驚きました。今回、とても楽しみにしていた事が三つあり、一つ目は川崎市内での料理。二つ目は他県の発表を直に聞けることでした。三つ目が発表後のグループ討議で、一番大きな収穫となりました。色々な方々の保育のお話を聞けたのはもちろんのこと、かみこあに保育園の小学校との連携について、非常に興味をもっていただいたことが、とても嬉しい事でした。そこには色々な県の１００％全開な方言が交じり合い、聞き取るのに大変な思いをしました。討議で驚いたのは、他園のよい取り組みをいかにして自園に取り入れていくかをその場で考えていたことでした。他県でも私たちのように子どもの人数が少ない園もあり、少ないなりの関わり方や方法、その進め方、そのために必要なことは何か、と時間が足りないほどの討議となりました。

最後に、発表園として到るまでご助言、ご指導、応援してくださった関係者の方々、笑顔で送り出してくれた職場の先生方、大変貴重な経験をさせていただきました事に感謝申し上げます。有難うございました。

主任保育士研修会に参加して

社会福祉法人　杉松会　まつばら保育園
主任保育士　茂内　昌代

９月１８日に秋田ビューホテルで行われた主任保育士研修会に参加し、“今、「幼児教育」に求められていること”を演題に関東学院大学こども発達学科准教授　三谷大紀氏の講演を聴きました。

３法令の改丁ポイントとして、

・養護が保育の基盤である。「養護」（ケア）とは、相手に対して、温かいまなざしを基に、心を砕く、手厚い関わり、その延長線上に「教育」（子どもを育てる営み）がある。

・「幼児教育」の積極的な位置づけとして、子ども主体の遊びを通した学びが重要である。子どもは、遊びの中で様々なことを学んでいる。子どもが主体で保育者が受け身になるのではなく、一緒に考え、楽しみ、悩むことで保育者も主体となって、子どもも保育者も保護者もワクワクする保育が実現する。子どもの「遊び込む姿」を生み出すためには、保育者の工夫や仕掛け、語り合える体制や風土を作っていくことが必要不可欠となる。

「養護」（ケア）が強調されるようになった背景には、経済的な貧困だけではなく、愛情・体験・言葉の貧困に対しての保育者の関わりや働きかけが重要視されたことを感じ、改めて自分の保育を振り返るきっかけとなりました。大人の関わり方が薄くて愛情を十分に受けられず、適切な言葉かけもされずに起こりうる貧困を未然に防げるように保育者一人一人が様々な部分に温かい眼差しを注ぎ、受け止めてあげることで、次のステップ作りに導いていきたいと思いました。

また、今、巷で話題になっていることを職員会議で取り上げることや保育を可視化してディスカッションするフォトカンファレンスについての話も参考となり、今後の保育に活かしたいと思いました。

午後の演習はビデオカンファレンスをワークショップ形式で行いました。子ども理解を深め、自らの保育や見取りについて振り返り、“私”の保育が“私たち”の保育になるよう、自園でも保育カンファレンスを取り入れながら本音で語り合い、子どもへの愛おしさを再確認し、共有し、子どもたちが見ている世界を共に見ることができる「仲間たち」になりたいと感じた研修でした。

秋田県保育士会　ブロック別勉強会に参加して

鹿角市子ども未来事業団 錦木保育園
保育士　金田一　貴絵

本研修会は、大阪総合保育大学学長　大方美香氏をお迎えし、大館市立中央公民館を会場に「乳児から３歳未満児の保育～学びの芽生えを支えるために～」という演題でご講演をいただきました。

４月から施行された保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領では、第２章「保育の内容」が大きく変わり「乳児期」「満１歳児以上３歳未満児」「満３歳児以上」の年齢で３区分されました。そして、３歳未満児の教育的な観点がはっきりし、乳児の保育は身体的発達の視点、社会的発達の視点、精神的発達の視点と大きく３つの視点に分かれています。乳児期に人としての基礎となるものが芽生え、それをどのように培うかがその後の人間形成に大きく関わってくるからであり「乳児は考えることができる存在」という事が注目されています。

大方先生は「人は０歳から考えて生きている。だからこそ、乳児期から最後までやり遂げること・諦めない気持ちをもつこと・繰り返し取り組むこと、粘り強さを育むことが大切だ」と冒頭から何度も力強く話されていました。このことから、粘り強さが心の逞しさに繋がる、人としての大事な基礎の一つだと理解することができました。また、もう一つ印象深かったお話が､「乳児の気持ちに気付こうとする応答性のある大人として子どもと接しているか？」ということです。乳児は、顔を見てくれる人に気付いて目が合うようになり、あやすことで笑うようになり、語りかけることで話すようになるなど、全ての活動が模倣であり、大人の関わりが子どもの育ちを左右します。共働き世代が増加し、利便性が向上した現代においては、人間関係が希薄になったり、生活における様々なものが簡易的な操作で済んだり、一昔前までは当たり前だった人との関わりや子どもの学びの場が変化しています。保育園で過ごす時間が増え、保育士の質が問われる中で、応答性のある大人の一人として、自分の保育を振り返ると共に、その重要性に改めて気付かされました。

講演の中では、隣同士で思いを伝え合ったり、グループ討議をしたりする時間もありました。テーマ（ままごと・抱っこなど）に対して、自分がイメージしたことを付箋に書いて出し合いました。付箋があることで思いを伝えやすく、出し合った思いを聞いて自分にはなかった考えに気付き、とても有意義な時間となりました。今日の学びを糧に、日々の保育に努めていきたいと思います。

湯沢・雄勝地区より

おらほのうんちく（地区）研修会

～職場のメンタルヘルス　　保育士が元気に働くために～

幼保連携型認定こども園　みわこども園
主任保育教諭　藤原　和美

湯沢・雄勝保育士会の主任保育士研修会を８月２９日に実施しました。午前は『メンタルヘルス』についての講話でした。秋田県産業保健総合支援センター　産業保健指導員　寺田誠氏を講師に迎え、メンタルヘルスとは何のために行うのかというお話から始まりました。

人にはそれぞれストレスがあり、ストレスに耐えうる力やストレスに対応する心の筋肉を鍛える必要がある。自分のストレスの傾向と対応を知ることで周りの人のこともよく見えてくる。ある程度のストレスは必要であるが、ストレスのかかりすぎはメンタルヘルス不調となり、病気の範囲にもなる。ストレスのかけ具合が難しいとのことでした。

逆境や困難から立ち直る力、日常的なストレスに対応する力は、感情の整理が大切で整理できていないとストレスがたまる。

① 感情（気持ち）に目を向ける。
② 認知（考え方）を変える。
③ リラクゼーションを実施することで回復力を鍛える。

怒りは決して悪い感情ではなく、辛い・悲しい等のマインドな感情に気付くことで穏やかな気持ちになる。また怒りの境界線を明確にし、その幅を変えることができると他人に対しての関係性が作りやすい。怒りの感情は６秒がピークなので６秒間を待つことで落ち着いて対応できるとも話されました。

人の話を聴き、労い、励まし、慰める、感謝することができれば、人はかなりの負荷にも耐えうる力を持っていると結ばれました。

午後からはＤ－ＳＴＹＬＥ　小番百代氏によるプリザーブドフラワーを使ったフラワーアレンジメント作りを体験させて頂き、自分の好きな花を選び、製作したことで満足感と癒しをもらうことができました。

今回の研修では、自分も周りの人たちも心と体が健康でいられるためにもストレスに耐えうる心の筋肉を鍛えていかなければいけないことを感じました。日頃から自分磨きをしたり傾聴したり好きなことをして自分も学びながら過ごすことができればいいなと思える研修でした。

おらほのうんちく（地区）研修会

秋田地区より

～保育所児童要録について～

社会福祉法人 山王平成会　ごしょの保育園
主任保育士 三浦　明恵

１１月２７日に、遊学舎にて「保育所児童要録について」の主任保育士部会研修会がありました。講師に秋田市子ども未来部施設指導室主査　菊地彩子氏を迎え、講話をいただきました。今年度から、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、保育所保育指針がそろって改定となり、どの施設に行っても必要な幼児期の教育をきちんと受けることができるように整合性が図られました。各園では、告示を受けて改定前から慌ただしく書類等の整備に勤しんだのではないでしょうか。

今回の研修会では、改定に伴って変わった保育所児童要録の書き方や重点についてのお話を聞くことができました。

見直しの観点として、

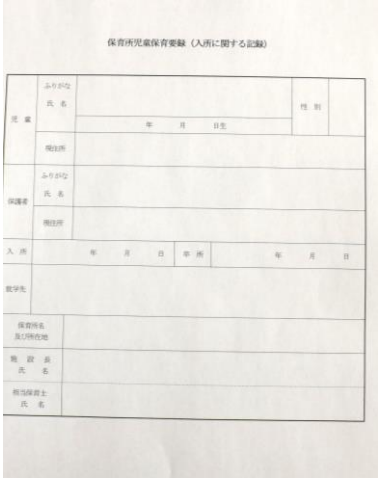
① 保育所保育を通じた子どもの育ちの姿を小学校に伝えるためのものとなる
② 記載内容の意図について、小学校教員も理解した上で読むようになってほしい
③ 要録の意義や位置づけを様式において明確に示すことができる

の３点が挙げられていたとのことです。

今年度から新たな様式となった保育所児童要録ですが、幼稚園、幼保連携型認定こども園、保育園とそれぞれ様式は若干異なるものの、記載する内容としては、ほぼ相違のないものになっていることを、菊地先生のお話から教えていただくことができました。

改定となった保育所保育指針では、「小学校との連携」に触れられています。改定を受けて、私たち保育士は、できることを各責任のもとでしっかりと行うことで意味のある連携にしていかなくてはなりません。その手立ての一つがこの保育所児童要録の活用だと思います。どの園でも、保育士がクラス全体の運営をしながらも、一人一人の子どもと丁寧に向き合い思いに寄り添った関わりを心がけていることと思います。指導計画の作成、行事の立案、諸々の書類作成等、日々の忙しい業務と並行して穏やかな保育をするというのは、簡単なことではありません。そのような中でも、明るく笑顔で子ども達と関わる同僚の姿を見ていると、自分も頑張らなくてはと奮い立たされます。小学校へ就学した後も、たくさんの人から愛される子ども達となるように、子どもたちと過ごせる今のこの瞬間を大切にしていきたいと思います。

私たち保育士がそのような思いを込めた要録が、小学校に就学してからの子ども達の育ちを支えるための資料となるよう、これからも職員と周知、共有し、取り組んでいきたいと思います。


保育所児童保育要録（入所に関する記録）

保育所児童保育要録（保育に関する記録）

（別紙）
幼児期の終わりまでに育ってほしい姿について

～ 研 修 風 景 ～

編集後記

２０１８年も残りあとわずかとなりました。今年も早いもので年末のご挨拶をさせて頂く時期となりました。皆さまにおかれましてはますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

今回の発行にあたり、原稿を寄せて頂いた先生方、本当にありがとうございました。５４号では、各地区の研修報告を紹介することができ、とても勉強になりました。日々、切磋琢磨の私ではありますが、皆さんの学びが秋田県の学びとつながる、また秋田県の保育の深みにつながると確信しました。今後も互いの学びを伝え合う瓦版の作成を目指していきます。

時候柄、お忙しいかと思います。くれぐれもお体などお崩しになられぬよう、お気を付けください。また良い新年をお迎え下さい。　　（広報副委員長　加賀屋寛子）

広報委員名

担当副会長	田中　真由美（毛馬内保育園）	
委員長	大坂　江利子（八森子ども園）	
副委員長	加賀屋　寛子（かわしり保育園）	
委員	阿部　明子（大湯保育園）	斎藤　玲子（綴子保育園）
	宮腰　真澄（船川保育園）	石田　義成（白百合保育園）
	福井　洋子（岩見三内保育所）	金子　久美子（下川大内保育園）
	戸嶋　富美子（おおたわんぱくランド）	
	伊藤　貢子（三重保育所）	佐藤　浩子（にしもないこども園）